



トップインタビュー企画

学長対談

テーマ

大学教育の「臨床性」



宮城学院女子大学
MIYAGI GAKUIN Women's University



学長対談ワークショップ「大学の臨床性」

学長対談の後、参加者8名が2つのグループに分かれて「大学の臨床性」について考えるワークショップを開催し、各参加者からの自由闊達な意見をグループごとにまとめ、それぞれの「思い」を発信し、今後の取り組みへの参考としました。

内容

- ①臨床性（臨床的活動）について
 - ・学内の臨床性
 - ・オンライン授業について
- ②大学での学び（リベラルアーツ）について
 - ・宮城学院女子大学での学び
 - ・社会人に向けた準備
 - ・学びの多様性



講評・メッセージ

他者を鏡として自分を知る「実り豊かな不一致」を――

「他者」という言葉が共通のキーワードですが、他者を鏡として自分を知る、自己認識です。歴史等を通して他者の価値観を知り、その上で価値観の一致を目指すという意見がありましたが、価値観の一致よりも、異なる価値観を理解することが重要です。一致しない価値観が新たな飛躍や発展をもたらす「実り豊かな不一致」という言葉もあります。



宮城学院女子大学 学長
末光 眞希

リベラルアーツを基本に他者に開かれた物語を

第一にお伝えしたいことは、「わきまえ」という言葉は、判らなくても質問をしないという意味ではありません。質問をし、判らないことを新しい知識に変えることこそがリベラルアーツの基本になるということです。

第二は今後、様々な臨床の現場で経験することが皆さんの物語になっていきます。その物語を「他者に開かれた物語」として、物語り続けて欲しいです。



東北大学 名誉教授
野家 啓一 氏



宮城学院女子大学
MIYAGI GAKUIN Women's University

宮城学院女子大学の特徴は「臨床性」にある

大学教育の本質である「対面」を重視する教育を、いかに実施していくべきか。
科学と社会にまたがる問題の中で、臨床性とマネジメントを両立させたい。

テーマ

大学教育の臨床性



宮城学院女子大学 学長
末光 眞希



東北大学 名誉教授
野家 啓一 氏

日時 = 2021年2月24日〔水〕13時30分～15時10分
会場 = 宮城学院女子大学 小ホール
企画 = 宮城学院女子大学

進行

フリーアナウンサー
宮田 敬子 氏



宮田 皆さん、今日は学長対談「大学教育の臨床性」、それに続くワークショップにご参加をいただきまして、誠にありがとうございます。

まず初めに、今日の学長対談「大学教育の臨床性」を主催しました宮城学院女子大学一般教育部教授、小羽田誠治先生から開会のご挨拶をいただきます。小羽田先生、よろしく願います。

小羽田 皆さん、こんにちは。ご紹介にあずかりました小羽田です。今日は学長対談企画ということで、主催者を代表して簡単に挨拶をしたいと思います。

この企画が持ち上がったのは去年の秋ごろだったかと思うのですが、まずはそのいきさつについて、お話ししたいと思います。

未光 今、ご紹介いただいたとおり、考えれば考えるほど、なぜ私はここにいるのだろうと思ってしまう。私自身は本当に元理系の研究者というところで、しかも、恐らく皆さんとは一番縁が遠いであろう半導体工学というのをずっと四十年間やってきました。

そういう中で、ご縁があって、本学的に言えば神様の導きによつて、この宮城学院女子大学に招かれ、大きな変化を感じました。その一方で、私は理系の研究者でありましたけれども、ずっと文系に対する憧れがあったのです。その意味で、先ほど大先輩と紹介し

そして、私は今日の進行を務めます、元TBC東北放送アナウンサーの宮田敬子と申します。どうぞ今日は一日よろしく願います。

今、学生さんが前に座っておられますけれども、伺いましたら、今日は学部も越えて、それから学年もいろいろ、四年生から一年生までいるということ、ぜひいろいろな立場から、疑問や意見を持ちながら、お話を楽しんでいただければと思っています。

未光 今、ご紹介いただいたとおり、考えれば考えるほど、なぜ私はここにいるのだろうと思ってしまう。私自身は本当に元理系の研究者というところで、しかも、恐らく皆さんとは一番縁が遠いであろう半導体工学というのをずっと四十年間やってきました。

ろな話をしてもらえばいいと思うのですが、この表紙に野家先生の似顔絵が載っている、これを見た皆さんが、ご本人を目の前にしてどう思っているのか、などというのも興味深いところです。私はあんまり似ていないのではないかなと思っているのですが（笑）…余談でした。

野家啓一先生は東北大学の名誉教授で二〇一三年から現在まで、東北大学総長特命教授も兼任をされておりまして。実は末光学長の大先輩で、今日は学長も対談をとっても楽しみにしているとおっしゃっていました。ぜひお二人の対談、いろいろな面から聞いていただきたいと思います。

そして、私は今日の進行を務めます、元TBC東北放送アナウンサーの宮田敬子と申します。どうぞ今日は一日よろしく願います。

から研究者という立場から監督者という立場に、さらには国立大学から私立大学と、言えば言うほど出てくる本当に大きな変化をこの一時期にされたと思います。そういった変化の中でこの大学の学長に就いて、そのイメージや印象というものはありますか。

大学教育の「臨床性」と「はざま」について

未光 今、ご紹介いただいたとおり、考えれば考えるほど、なぜ私はここにいるのだろうと思ってしまう。私自身は本当に元理系の研究者というところで、しかも、恐らく皆さんとは一番縁が遠いであろう半導体工学というのをずっと四十年間やってきました。

未光 今、ご紹介いただいたとおり、考えれば考えるほど、なぜ私はここにいるのだろうと思ってしまう。私自身は本当に元理系の研究者というところで、しかも、恐らく皆さんとは一番縁が遠いであろう半導体工学というのをずっと四十年間やってきました。

ということ、長々と話しても仕方ありません。私もこの対談をずっと楽しみにしておりましたので、早速始めていただいて、こちらは拝聴したいと思います。それでは、よろしく願います。

宮田 小羽田先生、ありがとうございます。皆さんもあの本は読まれて、似顔絵も見ていたのですか？じっくり見比べながら聞いていただけた

ということ、長々と話しても仕方ありません。私もこの対談をずっと楽しみにしておりましたので、早速始めていただいて、こちらは拝聴したいと思います。それでは、よろしく願います。

宮田 小羽田先生、ありがとうございます。皆さんもあの本は読まれて、似顔絵も見ていたのですか？じっくり見比べながら聞いていただけた

ということ、長々と話しても仕方ありません。私もこの対談をずっと楽しみにしておりましたので、早速始めていただいて、こちらは拝聴したいと思います。それでは、よろしく願います。

宮田 小羽田先生、ありがとうございます。皆さんもあの本は読まれて、似顔絵も見ていたのですか？じっくり見比べながら聞いていただけた

宮田 小羽田先生、ありがとうございます。皆さんもあの本は読まれて、似顔絵も見ていたのですか？じっくり見比べながら聞いていただけた



末光 眞希 宮城学院女子大学 学長

(すえみつ・まき)工学博士。1980年東北大学大学院博士課程修了。東北大学電気通信研究所教授、同ナノ・スピンの実験施設長、2018年東北大学学術研究員、同特任教授などを歴任。2019年宮城学院理事を経て2020年4月より現職。趣味は合唱。

集め iPad を一七台寄贈した、とかね。そういう、現場で困っている方に寄り添いながら、自分たちも学んでいるという姿に、深い感銘を受けて、臨床性であると思いました。

もう一つの理由は、皆さんもお読みになったかもしれませんが、このコロナの時代になって『ベスト』という小説をあらためて読みました。カミュが書いたこの『ベスト』というのは、オランという第二次世界大戦後の実在する町の出来事。ベストは実在した出来事ではありませんが、そこを舞台にして展開する小説ですが、主人公の医者リウーというのがある。そこに、いろんな登場人物が絡むのです。例えばパリからやってきた新聞記者ランベール。彼はパリに残

してきた恋人に会いたい

ら、早くこのオランの町から出たいと。しかし、町はロックダウンで出られない。そこで、友人の医師リウーに頼み込んで、私がペストに感染してくないという証明書を書いてくれないと言うわけです。するとリウーは、私はあなたがペスト

だ、と言つて批判するのです。

この小説を読み、例えば私が宮城学院女子大学での授業は全部遠隔にするとか、あるいは課外活動は全部禁止、と言っていることが、学生の皆さんにとっては多分抽象の言葉として響いているのだらうなと思います。

ランペールは要するに何が
言いたかったのかというと、あ
なたに、私の恋人を思う気持
ちが分かるのか、という悲痛
な叫びだったと思うのです。

やはりその臨床的な気持ちというのとは本当に大切だし、そういうことを考えた上で、目の前に起こっている出来事を判断していかなければいけない。たとえそのことによつて大きく判断が変わるといふことはなかったとしても、心

の根っこに、その臨床性を
持つて、どこまでできるか、と
いうことを考えていくこと
は、ものすごく大事だと思っ
たのですね。

カミュの『ペスト』の中には「抽象」という言葉の反対語は出てきません。では、抽象の反対は何かと考えたときに、「臨床」という言葉が浮かんできました。抽象と臨床と、言葉の語呂も良いので多分、臨床だろうと思って。そうしたら、哲学の言葉でも抽象と臨床というのは既にあったようで、後で分かりました。そこで、私

の中で「抽象」と「臨床」というのが一つの対語になってきました。その中で私たちは臨床と抽象のはざまで、どこを歩んでいくのか、ということをずっと考えながら、この一年間歩んできたように思います。

そこで「はざまの哲学」という、まさに哲学という一般的には非常に抽象的と思われる学問を営みながら、片や、後でも触れることになると思いますが、宮城県立美術館の移転反対運動をなさる。そういう非常に臨実的な実践活

それに共感して、私も鷗田さんたちと一緒に、京都に国際高等研究所という研究所があるのですが、そこで三年近くにわたって臨床哲学の研究会をやっていたことがあります。

それで、臨床というと皆さんが当然、頭に思い浮かべるのは臨床医学、クリニカル・メディシン。医学では臨床医学と基礎医学というふうに分かれますね。基礎医学は、先ほど末光学長が言われた抽象性の方に属します。つまり、基礎理論を探索する。それに対して臨床医学は病気になった方を、つまり患者さんを相手方にして、現場でその治療に当たるとというのが臨床医学です。ですから、そういう抽象性と現場性、臨床性というのは決して対立するものではなく、医学でもやはり、基礎医学の研究があるから、臨床現場で役に立つ。

今のコロナ問題でもそうですね。ウイルスの性質とか、そういうしたことについてのきちんとした理論的な研究があつて、それがウイルスを予防し

動まで幅広く展開されておられる野家先生に、ぜひ、はざまの哲学ということについてお聞きしたいと思っております。

宮田　　ありがとうございます。す。「臨床性」という言葉。皆さんも自分の学問をこの宮城学院女子大学で学んだときに、その実践からスタートしたこと、現場から学問がスタートしていったという経験が、それぞれにあるかもしれません。それが、ここで言う「臨床」ということ。

の「はざまの哲学」というのは、野家先生の著書でもありません。「はざま」といいますと、皆さんは、どんなイメージをお持ちますでしょうか。私は最初、少しネガティブなイメージがあつたのですが、野家先生の著書を読んでみますと、相對するように見える二つの項が、どこか共存する場所であり、どちらにもあるようで、どちらにもないとか、そういったことを表しているようでした。

ぜひ、その辺りの「はざま」の考え方ということにも触れながら、野家先生に今、末光学長からありました抽象性と臨床性についてなど、併せてお話しただけですか。

野家 ありがたいございました。先ほど紹介いただきましたが、現在、東北大学の名誉教授をしております野家と申します。今日は末光学長との対談にお呼びいただき、誠に光栄に存じます。

先ほど少し触れたと思いますが、私は、元々は理学部で物理学科を卒業しました。その後、哲学の中でも科学哲学という、いわば文系と

たり、あるいはワクチンの開発につながったりする。最終的にはそれが現場の患者さんたちの治療に役立つということになります。

だから、抽象性と臨牀性というのは確かに、表面的に見るとつながりが無いようですが決してそうではなく、両者は相補的といいますか、お互いに補い合い、別の角度から世界の一面をそれぞれ照らし出しながら社会を動かしていく、そういう役割になっているのではないかと思います。

ですから、今回、臨床性ということを末光学長が掲げられて、それを教育の現場において実践しようとされていることは大変素晴らしいことだと思います。その抽象性と臨床性というのは決して対立し合うものではなく、先ほど宮田さんから「はざま」という言葉が出ましたが、はざまというのは二つの対立するものの間ということですね。ですから、それは一見すると二つのものや、二つのことを分け隔てるような印象も与えます。その意味で宮田さんは、マイナス

イメージと先ほどおっしゃいました。そういう面もありましたが、分けるということとは同時に、その間に立つてつなぐことでもあるわけです。

だから今回、臨床性というものを考える場合にも、抽象性と対立させるのではなく、その臨床性と抽象性のはざまに立つて両者を媒介する、つなぐ、そのような方向で今日のお話が展開できればと考えております。

宮田 今、お話に出てきたその二つの言葉で考えると、もしかしたら反対なのかな、対する言葉は何かと探してしまいい、対立するように見えるのですが、実はそこにぐるぐる回るような、還流するようなものがあり、どちらかがあるから、どちらかが成り立つて、またどちらかを考えなくてはいけなくなるというような。

ただ、末光学長、どうでしょう、現代で考えると、二者択一であれば、すぐにどちらかを選ぶようになって、私たちにはその先にある還流まで目が行かないというところが、あるような気がします。



(のえ・けいいち) 哲学者。東北大学理学部卒業、東京大学大学院理学系研究科博士課程中退。プリンストン大学哲学科客員研究員、東北大学理事・副学長を経て東北大学名誉教授・立命館大学客員教授。専門は科学哲学。著書に『はざまの哲学』（青土社）など多数。

コロナ禍での課題

末光 そうですね。まさにその問題がコロナの時代になって顕在化したように思えます。例えば、授業を対面でするか、遠隔でするか、二者択一的に考えますよね。今、本当に対面でやっていたのかとか、逆にいつから、対面になるのかとか。そういう、やっていたのか悪いのかという、CO、NO、COという二者択一に、われわれは追い込まれたように思えます。

そして、本当に人と会えなくなったコロナの時代において、本当に人と人をつなぐということがこれほど大切な時期もないし、本当にこれほど大切だったのだ、と自覚した時代もないと思います。

遠隔と対面の話に戻れば、これは九月の入学式でも申し上げたのですが、どちらかではなくて、前期全部を遠隔でやったことで私たちはたくさんさんの経験をしました。また、ノウハウも身につけました。受ける側も送る側も。そういう中で、九月から対面にでき



たというのは、もし第二波、第三波が来て、それがひどいものだったとき、いつでも遠隔に戻れる。だから私たちは対面ができる、そういうふうに思いました。

そのことにおいて、決して対面か遠隔かという二者択一ではなくて、後でバックアップとして遠隔が控えているから、私たちはこのコロナでも対面ができるのだと。そういうふうに捉えようというふうな視点を身につけて、そして、ゆつくりではありますが、対面に踏み切ったということがあります。コロナの時代において、私は見えないものに目を注ぐということを入入学式で言いましたが、そういうふうに見えないところでつながっ

科学と社会との関わりというものが極めて大きく近づいてきた。

そして、第二次世界大戦後は、今日われわれが使っているようなインターネット、あるいは車に搭載されているGPSなど、これらも全て軍事技術の開発から出てきたものです。それで、現在では民間技術と軍事技術の境界がなくなっているような事態、それを英語ではデュアル・ユースと言います。デュアル・ユースというのは二重使用ということ。つまり、軍事技術にも使われれば、民間技術にも使われるという、そういう状態が二〇世紀後半から二一世紀にかけて著しく拡大してきたと言えます。



ですから、軍事技術の開発というのは、その後の二〇世紀の世界に大きな影響を与えたわけですが、戦争という不幸な出来事を媒介にして、

ていくということがあらし、そのことが本当に大事だなと思っています。

そこで、野家先生にお聞きしたいのですが今、コロナの話になりました。コロナという時代はそういう意味で、本当にいろいろな問いを私たちに突き付けたと思います。哲学の世界でもそうだったと。歴史の中でどういうふうにコロナというものを理解したらいいか。あるいは哲学的にどういう意味があるかということもあります。それから科学者が、あるいは医学者が、これは危ないからやめなさいと言う、あるいは、こまではやつてもいいですよと言うとき、しかし、そうしたある意味での安全宣言が、社会の安心には必ずしもつながらないという、そういう科学的な知と社会的な理解との間に乖離がある。そうしたいろいろな問題が、このコロナという一つのものを通して、いろいろな局面で顕在化してきたように思えます。先生はこのコロナをどういうふうにご理解されていますか。しやいますでしょうか。

それからコロナウイルスの場合にも、感染を止めるにはまさにロックダウン、都市封鎖をするのが一番近道なのですが、そうすると経済が立ち行かなくなる。つまり、一方では感染症の防止ということ、他方では経済活動の維持ということがジレンマ状態にあるわけです。

ですから、単なる事実、自然科学だけでは解決ができません。政治や経済、社会や文化、そういったことが必然的に自然科学的な事実、つまりコロナウイルスというのはどういうものかとか、そういうことに経済や社会の問題が密接に関わり合ってくるわけですね。したがって、自然科学だけではコロナの対策はできないし、逆に、人文社会科学だけではコロナの対策はできない。これが「科学なし／だけ問題」です。

つまり、現代社会で起こっている問題というのは、基本的に科学なしでは解決できません。コロナをはじめとして、原発事故もそうですし、地震

「科学なし／だけ」問題

野家 皆さんもこの一年間、毎日ニュースで感染者が何人とか、あるいは病室の占有率が何%とか、そういうニュースばかりでうんざりしておられるかとは思います。また、外に出てみなくて一緒に騒ぐこともできないということ。この社会自体が閉塞したような状態になっていますが、こういう時こそ、きちんと考えるべきことを考えておく必要がある、と思います。

それで今、末光学長からコロナの時代、いよいよ日本でもワクチンの接種ということが始まりましたが、まだ不安定要因といえますか、副反応がどの程度あるのかということとはつきりしない。しかし、われわれは待つてはいられないわけですね。

つまり、科学というのは完璧に一〇〇％確実なことではないわけですね。たとえば天気予報にしても明日の天気が一〇〇％当たるわけではないですね。そういう状況の中でわれわれは決断する、判断す

ることを迫られているわけですね。だから、科学で全てが解決されるわけでもないし、何か新しい技術が発明されて、それで万事オッケーだということでもない。

つまり、科学というのは必ず不確実性を持ちますし、技術というのも完璧ではありません。不完全性を持つています。ただ、社会に起きる問題というのは、そういう科学の不確実性と技術の不完全性の下でも、やはり一日も待つてくれませんので、いつからワクチン接種を始めるのか、いつから非常事態宣言を発し、解除するとか、決断せざるを得ないわけですね。だから、科学技術は確かに頼りにはなりますが、完璧ではない。そういう状況の中で決断せざるを得ない。そういう科学と社会との関係を「トランス・サイエンス」という言葉で言い表すことがあります。トランスというのは何々を越えるというよ

うな、あるいは横断するという言葉の意味です。

今までは、事実については自然科学が全て、まあ全てで

や津波。それも科学なしでは解決できない問題ですが、科学、だけでも解決できない。それを「科学なし／だけ問題」というふうに大阪大学の平川秀幸先生は呼んでおられます。まさに現在われわれが直面している問題というのは、ほとんどが科学なしでは解決できないけれども、科学、だけでも解決できない。そういう問題だというふうに考えていると思います。

それが、まさにさっき末光学長が言われた科学と社会の関わり、関係。そして、抽象性と臨床性の関わりということにもつながっているのではないかと思います。

末光 ありがとうございます。まさにそのことをずっと考えておりました。コロナの時代にもう一度戻しますと、この時期に対面をやっていたのかとか、いろんなことがあります。そして、投書などと言われたりもするわけです。そういうときに、科学的な見地でどこまで安全かということが一つある。

例えば、学校を開くことが

はないにせよ、解明する役目を持つていた。それから価値判断については、これは人文社会科学が、主としてその役割を担う。つまり、事実と価値というのが、大まかに分かれて、両方でそれぞれ独立に事実の確認と、それから価値の判断を別々にやつても、それほどの不都合はなかったわけですね。

ところが、とりわけ二〇世紀の後半、つまり第二次世界大戦後ですね、科学と社会の距離が著しく縮まりました。

二〇世紀初めの第二次世界大戦、これはケミカル・ウォー、化学の戦争。それから第二次世界大戦、二〇世紀半ばはフィジカル・ウォー、物理学の戦争。第一次世界大戦では毒ガスが使われました。そして、それを発明したのはノーベル化学賞を受賞したフリッツ・ハーバーという化学者でした。

それから、原子爆弾が第二次世界大戦では使われました。広島と長崎に投下されたわけですけども、これは最初、アインシュタインが当時のルーズベルト大統領に書簡を

せんとか、全くゼロとは言えませんが、安全で、では完全に安全ではないのです。と捉えられて、そんなことやっていいのかという話になるのです。

そこで必ず科学の言葉と、それから市井の方々が受け取る間にすごくギャップがある。そこを、まさに「科学なし／だけ問題」と関わります。つまり、言葉が必要になると思います。

コロナの時代、そういう一つの判断をどうするかというときに、科学的な知見をどのようにに、普通の人が分かるようにに事実を価値につなげていくかというのはとても難しいと思うのですが、先生の長年の経験の中で、科学者の側にも多分責任があるだろうし、それを受け取る、あるいはそれを媒介するメディア、そして受け取る一般の市民の側にも改善すべき点があると思います。その辺は先生、いかがでしょうか。

野家 今、末光学長が指摘されたことは大変重要なことなのですが、先ほどトランス・サイエンスという言葉を紹介

しました。つまり、現在は科学だけの問題というのはいなくなっている。科学を超えて政治や経済文化や社会とつながりがある問題が、われわれが直面しているほとんどの問題だということをトランス・サイエンスと言いました。それが裏腹というか、表裏一体になっているのが「リスク社会」という概念です。



これは、ドイツの社会学者でウルリッヒ・ベックという、日本にも来たことがありますが、そのベックという人が一九八六年だと思いますが、リスク・ソサイエティー、『リスク社会』という本を出版しました。一九八六年というのはチェルノブイリの、ロシアで原発事故が起きた年で、そのせいもあつてヨーロッパではベストセラーになりましたし、ドイツではギムナジウム、中学・高校の社会科学の副読本にも採用されたような本です。そこで、近代というのは、資本主義社会と言ってもいいのですが、そこで最初に問題になったのは貧富の格差でした。だから、政府の役割というのは、いろんな税制、累進課税とかさまざまな方でその貧富の格差をなるべく縮めるということだったのですが、ベックの言うところによれば、二〇世紀に入ってから、とりわけ第二次大戦後は、さまざまなリスクというもの、社会においては貧富の格差と並んで大きな問題になってきた。

と一九六〇年代七〇年代には公害という、公の害ですね。水俣病とか四日市ぜんそくとか、そういった公害が起こりましたし、ヨーロッパでもさまざまな環境破壊ですね。酸性雨や大気汚染であるとか、そういった社会的なリスクが広がりました。そのリスクを最小限に押しとどめる。今回のコロナウイルスというのも大きなリスクなわけですが、その社会的なリスクを最小限に押しとどめるということ、二〇世紀に入ると政府の重要な役割になってきた。

だから、彼は、『第一の近代』においては貧富の格差が主要問題でしたが、もちろん今日でもそれはありますし、第三世界といわれるアフリカやアジアの地域では、それがむしろ主要問題だとも言えるのですが、いわゆる先進国では貧富の格差に加え、リスクの縮減ということが大きな課題、政府の役割になってきた。それを「リスク社会」と呼んでいます。

ですから、現代社会というのは、もちろん交通事故とか何とかを含めて、リスクをゼロにすることはできないので。すね。いかに科学技術が発達して、自動運転というものもが今話題になっていますが、リスクをゼロにすることはできない。とすれば、リスクがあるということをわれわれは認識していることをわれわれは認識した上で、そのリスクをどうやって減らすか。これは震災から十年目で、防災や減災ということにも関わってくるわけですが、リスク社会というのは、リスクがあることを前提としてさまざまな防災教育であるとか、あるいは感染症の予防とか、そういった政策を進めていかなければならない時代という意味で、リスク社会と呼ばれます。

にあり、という問題解決に役立つのかという科学リテラシーと同様に、その裏側で、その科学技術がどのようなリスクを伴ってこの社会を揺るがしているか、を考えなければならぬ。

だから、科学のもたらす恩恵と、それからリスク、マイナス面。その両者をきちんと踏まえた上で、科学技術の在り方に対しても一般市民が、シビリアン・コントロールという言葉があります、シビリアン・コントロールとは軍事技術だけではなくて、科学技術についても、やはり一般市民がきちんとした発言をしていくことが、これからの社会では必要になってくるのではないかと私は考えています。

宮田 コロナ禍の中にあつても、それからいろいろな問題があり、いろいろな論争が巻き起こって、この人はなぜ、そんな意見を言うのだろうか、もしかしたらテレビを見ながら皆さんも思うかもしれせん。そういったときに、いろいろな視点が今、お話から出てきました。

科学的合理性、科学者の立場に立てば、それは合理的である。社会的な合理性、一般の立場からいけば、こちらはこう思う。そういった立場の差があるからこそ、いろんな議論が出てきて。

発点として、例えばリスクという言葉を私たちがどういうイメージで捉えているか。つまり、この行いには、例えばワクチンにはこれだけのリスクがありますと言われたときに、そのことが自分事としてどこまで受け止められるか、という問題がすごく大事なことだと思えます。

例えば十万人に何人かの異常反応がありますといったときに、自分がその十万人の中の一人に入るか入らないかということは大問題なのですね。コロナの問題を考えると、初期の頃ですけれども今、一年前を思い起こすと、二月、三月で感染者が何人になりました。だんだん増えてきましたというときに、どこか他人事として受け取っていた。だけど、その中で志村けんさんが亡くなったとか、岡江久美子さんが亡くなったというときに、何か、自分で言うのも恥ずかしいのですが、急に怖くなったのですね。自分の知っている人がこの病気で死ぬのだということが分かった途端に、もう途端に自分事に

近づいてくるわけです。リスクというのは一種の確率なので、例えば十万人に何人かのこういうリスクがあります、と言われたときに、どこかで、自分はそれには入らないと思っているところがあるのですね。けれども一方で、それはやはり入るかもしれないということも含めて、そのリスクをみんなで引き受けていくといううまでは、かなり高い意識が必要のように思います。そこが私は科学リテラシーの大事なところだと思います。

つまり、科学リテラシーというのは、数学ができるとか物理の基礎が分かっているということだけではなくて、そのことが自分の一人の市民としての生き方に、どう生き方を变えていくかだと思います。

説明され、あるいは、昨日たまたまテレビを見ていたら田村厚生労働大臣が出てきて、現在の状況について説明をしていましたけれども、やはり包み隠さず政府が情報公開をするということが大事で、それをわれわれはいろんなマスメディアを通じてきちんと受け止める。そして、分からないことがあつたら、今はネットや何かで容易に調べられるわけですから、それを心がけるということが、まず出発点だろうと思います。

それ以上詳しく知ろうと思つたら、現在はいろんな本やウィキペディア、そういう情報源はありますし、それから専門家に聞くということも不可能ではないと思います。

例えば、皆さん病院に行つてお医者さんに問診を受けますね。そうすると、インフォームド・コンセントということを聞いたことがありますか。これは、お医者さんから説明を受けて例えばガンになったとしますね、そうすると、手術で患部を切り取るのがいいのか、それとも化学療法で薬を

科学の合理性、科学者の立場に立てば、それは合理的である。社会的な合理性、一般の立場からいけば、こちらはこう思う。そういった立場の差があるからこそ、いろんな議論が出てきて。

科学の合理性、科学者の立場に立てば、それは合理的である。社会的な合理性、一般の立場からいけば、こちらはこう思う。そういった立場の差があるからこそ、いろんな議論が出てきて。

科学の合理性、科学者の立場に立てば、それは合理的である。社会的な合理性、一般の立場からいけば、こちらはこう思う。そういった立場の差があるからこそ、いろんな議論が出てきて。

科学の合理性、科学者の立場に立てば、それは合理的である。社会的な合理性、一般の立場からいけば、こちらはこう思う。そういった立場の差があるからこそ、いろんな議論が出てきて。

科学の合理性、科学者の立場に立てば、それは合理的である。社会的な合理性、一般の立場からいけば、こちらはこう思う。そういった立場の差があるからこそ、いろんな議論が出てきて。

科学の合理性、科学者の立場に立てば、それは合理的である。社会的な合理性、一般の立場からいけば、こちらはこう思う。そういった立場の差があるからこそ、いろんな議論が出てきて。

科学の合理性、科学者の立場に立てば、それは合理的である。社会的な合理性、一般の立場からいけば、こちらはこう思う。そういった立場の差があるからこそ、いろんな議論が出てきて。

科学の合理性、科学者の立場に立てば、それは合理的である。社会的な合理性、一般の立場からいけば、こちらはこう思う。そういった立場の差があるからこそ、いろんな議論が出てきて。

科学の合理性、科学者の立場に立てば、それは合理的である。社会的な合理性、一般の立場からいけば、こちらはこう思う。そういった立場の差があるからこそ、いろんな議論が出てきて。

科学の合理性、科学者の立場に立てば、それは合理的である。社会的な合理性、一般の立場からいけば、こちらはこう思う。そういった立場の差があるからこそ、いろんな議論が出てきて。

科学の合理性、科学者の立場に立てば、それは合理的である。社会的な合理性、一般の立場からいけば、こちらはこう思う。そういった立場の差があるからこそ、いろんな議論が出てきて。

科学の合理性、科学者の立場に立てば、それは合理的である。社会的な合理性、一般の立場からいけば、こちらはこう思う。そういった立場の差があるからこそ、いろんな議論が出てきて。

科学の合理性、科学者の立場に立てば、それは合理的である。社会的な合理性、一般の立場からいけば、こちらはこう思う。そういった立場の差があるからこそ、いろんな議論が出てきて。

科学の合理性、科学者の立場に立てば、それは合理的である。社会的な合理性、一般の立場からいけば、こちらはこう思う。そういった立場の差があるからこそ、いろんな議論が出てきて。

科学の合理性、科学者の立場に立てば、それは合理的である。社会的な合理性、一般の立場からいけば、こちらはこう思う。そういった立場の差があるからこそ、いろんな議論が出てきて。

科学の合理性、科学者の立場に立てば、それは合理的である。社会的な合理性、一般の立場からいけば、こちらはこう思う。そういった立場の差があるからこそ、いろんな議論が出てきて。

飲んで、あるいは放射線治療をしたほうがいいのか、いろんな選択肢があるわけです。そういう場合に、どれが自分に一番合っているのかということをお医者さんからの説明を聞いて、最終的には自分で決断しなくてはならない。実は一昨年、僕はガンの手術をしたので、そういう場面に立ち会いました。

つまり、お医者さんからいろんな説明を聞く。この手術はこういうリスクがあるとか、化学療法をすると、例えば髪の毛が抜けるというリスクがあるとか、そういういろんな情報を集めていったら、最後は自分で決断しなければならぬわけです。どれを選ぶかを。

昔は、お医者さんの言うことは何でも聞くのが患者の役割で、お医者さんの言うことに一〇〇％従いなさいということが慣例でしたが、最近はお医者さんの方でも、これこれの治療法があり、それぞれにこういうメリットとデメリットがあるので、最終的に選ぶのは患者さん、あなたで

すよ、というふうに言うようになりました。やはり自分がある病気にかかったとしたら、それをネットで調べたり、いろんな情報を集めたりする必要があります。

そして、さらに最近ではセカンド・オピニオンというのがありますね。つまり、このお医者さんではちよつともの足りない、あるいは少し心配だというときには、別のお医者さんに診てもらい、その判断を総合して最終的には自分で自己決定し、治療法を選択するということもできます。

だからそういう意味で、皆さんも医療という現場では多分、自分で情報を集めたり、あるいはお医者さんという専門家に根掘り葉掘り自分の病気について聞いたり、そういうことをします。まあ、皆さんはまだ若いから大丈夫でしょうけれども、僕ぐらいの年になると、お医者さんとの付き合いも深くなるので、だいたいいろいろ根掘り葉掘り尋ねることがありますが、そのように情報を収集して、最終的には自分で決定するという

ことは、最近の医療の現場では広がっていると思いますが、それを科学技術の問題についても、あるいは今のような感染症の問題についても、少し広げていく必要があるのではないかと考えています。

科学技術は自分には縁遠くて、直接にはその小さな物語にはなり得ないと思っているのかも知れませんが、必ずしもそうではないのですね。例えば福島原発事故の後で、女川の原子力発電所を再稼働すべきかどうかという議論があります。そういうさまざまな問題が、科学技術の進歩か抑制か、そういった問題に絡まってわれわれの社会生活を形づくっていくので、そこではやはり自分なりに情報を収集して、〇〇サインを出すか、あるいはストップをかけるか。別に福島県民や女川町民でなくとも必要になるのがこれからの時代、これからの社会だと思えますので、そういう科学リテラシー、情報収集を自分で積極的に行つて、それをさまざまな判断、選挙の投票とかいろいろなところで活

事だと思うのですね。



再び遠隔授業か対面授業か、の話に戻すけれども、その時点で対面授業を再開していかどうかということ、は、本当のところ分からないのです。しかし、それは結局、例えば片や対面、片や遠隔という二つの極致があったときに、「行動者は常に非良心的である」という言葉がありますが、どちらかに決めるということは必ず一か〇か、対面か遠隔か、というどうしても二者択一的な文脈に追い込まれてしまうところがあります。ただ、それは正確ではない。現に私たちがやっているように、七割対面、三割遠隔というところで今やつていますが、私たちが実際に取っている行動はアナログです。完全に対面でもないし、完全に遠

隔でもない、その中間の行動を取っています。しかし、そのときに、私は併せて、どういう思いで今それをするか。私の思いは、正しいのかどうかは分かりませんが、私の思いは、大学というところは対面をするところだと思っているのです。人と出会う場所なのです。それは、先ほども出たと思いますが、他者と出会うということがすごく大事で、そのことが私たちを豊かにし、私たちが大学で学ぶことの最大の意味は他者と出会うためののです。

それで、その他者と出会う場を、初めから放棄していは大学ではあり得ない、と私は常に思っていました。だから、今どこまでできるかと常に考え、いつも対面のほうを見ながら、どこまでできる、しかし、ここから先はさすがに駄目だということを言つてきた。私はサッカーが好きだからサッカーのバックラインの上げ下げと、いつも言うのですが（笑）センターハーフがどこまで上に上げられるかという、そういうことをいつも意識しています。やはり、常に隙あらば

攻め入りたいと思つています。

リベラルアーツについて

末光 そこで、その「思い」を同時に併せて届ける。こういう思いである、だけど、今はこういう状況だから今はここまですと、それを言う。やはり、そういう意味で一人一人の情報公開ということも、思いの情報公開といいますが、それもやはり大事ではないか、と思えます。そういうこともできるということも、リベラルアーツの大切なスキルでは、と少し思い始めています。

ということではリベラルアーツなのですが（笑）。まず野家先生、リベラルアーツと簡単に言いますけども、世の中には一般教育や教養教育、リベラルアーツとかいろいろな言葉があるのですが、これはみんな同じ言葉なのでしょうか。

野家 少なくとも日本では大体、同じように使われていると思います。ただ、歴史的な由来を尋ねると、それぞれに伝統があり、違った意味を持つていることになりました。まず、リベラルアーツです

用していくことが、これから次第に、そういう場面が増えてくると思えますね。

その意味でも、科学リテラシーと、それから科学技術に伴うリスクに関するリテラシーというものはこれからますます重要になって、先ほどの繰り返しになりますが、それを踏まえた上での皆さん方、市民による科学技術や、あるいは医療、感染症も含めてのシビリアン・コントロールという、市民的な感覚。ある意味ではコンセンサスで構わないわけですが、そういうものを土台にした判断というものが、これからますます重要になっていく。



そういうところで、先ほど少し話を振りましたが、宮城県美術館の移転問題もそういう問題だと思つて、私自

身はコンセンサスというか、市民的な一つの役割として関わったということです。

宮田 ありがとうございます。本当に大きな物語、一般に流れているその大きな物語をいかに自分のものとして、自分に紐付けて考えることができるか。その上で、情報収集をして、さらにそれを自分で判断していく、ということ

を進めまして、大学のリベラルアーツという、宮城学院女子大学でも大切にしていられつしやるということにも話が及んできますね。

宮城学院女子大学の判断

末光 はい。話がそこに行くわけなのですが、一つだけ言い残したことがあります。先程、せつかく宮田さんが「思い」のベクトルということ振つてくださったときに、ちよつと言

が、これはさかのぼると古代ギリシャやローマのアルテス・リベラーレスという言葉にまでいきつきます。日本語ですと、「自由学芸」と訳されま

す。これは、だんだん整備されて、中世のヨーロッパでは自由七科という、七科目の必修科目ですね。教養を身に付けるための。

それから、「自由」というのは、これはギリシャ・ローマ時代には奴隷制度があつて、自由人と奴隷という階級の区別がありました。それで、自由人が身に付けるべき教養が自由学芸、あるいは自由七科。七つの科目というのは四科と三科に分かれていました。合わせて七です。三科というのは、これは言葉を操る能力で、当時はラテン語が学問の共通語。今だと英語に当たりますね。それで、ラテン語に関する文法学、これは当たり前といえ

ば当たり前です。英文法みたいなものですね。それから、修辞学。これは、ラテン語を使つて文章をきちんと書くという能力、それを修辞学、レトリックといいます。まずラテン

い忘れたことがあります。今の話の流れは、一人一人の市民として皆さんがこれから、今も既にそうですけども、一人一人の市民として政府を中心としてさまざまな情報公開がなされることを前提として、そういった情報をどう取捨選択して、自分の判断につなげていくかという話の流れにあります。

そこで、そこに行く前に一つだけ。私は今、学長として、宮城学院女子大学のさまざまなことについての判断を最終的にするわけです。皆さんはそういう立場にないかもしれませんが、例えばこの中で教師になる方がいらつしやるかもしれない。そうすると、教壇に立つた途端に生徒に対して、これはしてはいけません、これはしなさいということとを、ある場面においては言わなければならぬことがあると思います。そこで、私が今思っていることは、何をやっていいか悪いかわかりませんが、どういう思いを持って、それを言っているかということ併せて話していくことが、とても大

りますよね。そうすると音楽は、昔は理科系の科目でした。なぜならば、音楽には楽理がありますが、音楽理論というもの、これは数学と密接な関わりがある、ということがヨーロッパではピタゴラスの時代から、そういう伝統があります。それから天文学とも関係があるのです。宇宙にはハルモニア・ムンディといいますが、宇宙の和音というか、それぞれの星が和音を持つていて、天上の音楽を奏でている。だから、天文学と音楽も密接な関係にあり、それから数学と音楽も表裏一体ということで、音楽は四科、クワドリビウム、つまり算術や幾何学や天文学と同等に並べられている科目でした。今は、音楽はもちろん芸大とかそういう人文系の学問になつていますが、昔はそういう学問分類がなされていたという事です。

それから一般教育、ジェネラル・エデュケーションというのは、これはアメリカで始まったことで、日本には戦後ですね、アメリカの教育制度が取り入れられて、それに伴つて

ジェネラル・エデュケーションが大学の教養部で教えられることになりました。つまり、戦後は大学改革が行われて、旧制の高等学校、仙台には旧制二高がありました。それが国立大学の教養部に編入されて、東北大学ですと新制大学の教養部に旧制二高が編入された、という歴史があります。それで、そこで行われるのが教養教育という呼び方をされたわけです。

ですから、それぞれ意味は違うのですが、日本では大体お互いに重なり合う概念として使われていますが、最も歴史があるというか、伝統があるのはリベラルアーツということになります。

宮田 リベラルアーツといえば一般教育であり、私は大学の時に一般教育として受けていましたが、一般教育にはすごく古い歴史があるということ。しかし、そうなつてきますと文系も理系も、そこにはあまり区別がないのではと今、お話を聞いていて思ったのですが、末光学長、いかがですか。

末光 そうですね。私も理系

の人間がこの、まあ音楽がありますけども、人文系の大学にやつてきました。ですが、もともと私は文系に対するすごく憧れがありましたからハッピーなのですが。

海外の教育事情はよく分かりますが、私の理解するところでは、日本ほど文系、理系がはっきり分かれているところはないし、しかも中三ぐらいですか、結構若い時期にもう理系、文系みたいな何となく色分けができて、高校に入ったらもうはつきりクラスも違うと。そういう国はないと私は思っています。

アメリカでも、東海岸の有名な大学などはもう全く一緒に、理系の人間であろうとも人文系の、それこそギリシャ哲学から全部学ばなければいけないというカリキュラムを組んでいると思う。そういう意味で、文系と理系が文理融合さ

れているというのはとてもいいと思います。

先生のご著作の中に「文理相乗り」という言葉があつて。文理統合ではなくて、文理相乗りということが、心に良い

返つていただいて、教養部を廃止することによつて起こったこと。あるいは、そして今それを振り返つてどうお考えか、ということをお話したいだけですでしょうか。

野家 このことを話すとだいぶ長くなるので、簡潔にお話します。教養部を廃止したことには、やはり今、末光学長がおつしやつたように、功罪相半ばするところがありますね。

功のほうから言うと、教養部というのは、要するに大学が四年ありますと、そのうち最初の二年間は教養部に属して、三、四年が上級学部。つまり工学部とか理学部とか文学部とか法学部に進学するというシステムだったわけです。

ところが、さつき少し話しましたが、その教養部というのは基本的に旧制高校。仙台の場合ですと旧制二高の先生方が東北大学の教養部に横滑りして教鞭を取つておられたので、そのために、教養部とそれから上の学部では多少の、まあ差別意識とは言わな

意味で引つ掛かったのですが、先生はどういうニュアンスで、その文理相乗りという言葉をおつしやられたのですか。

野家 私自身が先ほど申しましたように、理学部の物理学科を出てから哲学、科学哲学の方に変わったので、文理相乗りの典型みたいな人間です。

前に私、今問題になっている学術会議の会員をしていた時に、学術会議は一部、二部、三部と分かれています。一部が人文社会系、二部が生命科学と医学、三部が理工系という、そういう形で分類されていたのですが、先ほども言ったように、いろんな問題が今は

文系だけでとか、理系だけで解決できる問題ではなくなっているのですね。それで学術会議でも、いろんなテーマに合わせてその一部、二部、三部が相乗りで委員会をつくつていろんな問題解決に当たるということが多かつたのです。

その時に、どういう名前にするかということで議論があつた。理系の先生方は文理融合というふうな言い方をされたのですが、文理融合に對

あつて、そのことがいろんな意味で大学運営にも響いてきたということがあります。

ですからその意味では、そういう枠を取り払つて教養部を解体して、ある意味で一年からそれぞれの学部に属する縦割りといいますが、そういうことになったことで、これまであつた身分上の閉塞感みたいなものが、取り払われたということでは、良い面があります。

ただ逆に、今、末光学長が言われたように、教養ということに対するリスク、尊敬の念というのが失われてしまった。それで、先ほど宮田さ

してはその一部というか、人文社会系から反発がありまして。つまり、文理融合というと吸収合併、理系の方に吸収合併されるような印象で良くないと。それで、人文社会系では文理連携というふうな言葉を使つたのですが、これだと

吸収合併ではなくて、対等合併ぐらいにはなるか、という。それと同時に、私自身としてはむしろ一つの問題を解決する、それが、後で出てくるか

もしれませんが、臨床性ということと関係してくるので。その一つの問題を解決するのに、文系と理系が共働する、共に働く。そういうことからすれば、一つの船に乗つて

お互いに役割を決めながらある方向、目標に向かって進んでいくという意味で、相乗りのほうがいいのではないかと。

お互いに協力し合つて船を動かして、目標へ向かつて進んでいく。そういう意味からは、融合とか連携というよりも、相乗り。それで、一つの運命共同体だというふうな意味も込めて、「文理相乗り」というふうな言い方をしておりました。

一般教養について

末光 ありがとうございます。亡くなった評論家の加藤周一先生が、教養というものについてとても分かりやすい例えを書いていらつしやつて、車づくりで考えると分かりやすいというのですね。私は工学部の人間でしたから、車を造るということとは、どれだけ乗り心地が良くて、燃費が良く

て、スピードが出て、性能がいい車を造るかという問題が一つある。だけでも、それだけでは車を造つたことにはならない。その車を運転してどこへ、そして、なぜそこに行くのかという、その行き先というものを考えないと、車というのは成り立たないのだと。それが教養だということを彼は言っているのですね。

それはとても示唆に富んでいて、まさにそれが人文系でいた世界では、とにかく良いものを造れば売れるはずだという、もう性能第一主義みたいなそういう社会でしたが、そうではなくて、まさに

両方あつたと思います。

宮田 本場にそういった面があつたのかな、と思いますね。私も学校を出て社会に出て、今、比較的専門性が求められるというところもあるのですが、実は専門を突き詰めていくとそこからどんな必要

知識が広がっていく、その大本にあつたのは専門分野とは全く違ったところのことを知っていればよかった、と思うこともあります。でも、それを社会に出てからあらためて学び直すというのは非常に難しいところがあつて、それを大学という環境の中でリベラルアーツを学ぶことができるという点において、大学の果たす役割というのは実はとても大きいのではないか、と思っ

ています。

末光 学長、まとめにはなつてくるのですが、やはりそういうものを大切にしながら、今も運営を行い、それから臨床性を考えているこの大学、学生の皆さんもこうして集まつていらつしやいますが、メッセージはありますでしょうか。

今、持続可能な社会が大事になつてきたときに、なぜ車を、なぜ、そこへ行くのかと。さらに、どこに行くのかと。そういうことも併せて考えないと、自動車産業一つ取つても、あ

るいは車文化一つ取つても、成立しないのだということを彼は言っていました。そのようなことを思うにつけ、相乗りということは大事だと思っ

ています。

ところで、先生は、東北大学が一九九三年ですか、教養部を廃止された時も少し関わつておられたと伺つております。

教養、あるいはリベラルアーツということに関しては先ほど先生が、日本においては旧制高校の中で培われてきた一つの伝統があるとおつしやつておられますが、そのことは、良い面もあれば、しかし、そういう人たちがエリートになり、

日本は戦争に突入していったという事実もあります。

それから、私の理解するところでは、そういう旧制高校的な教養主義というのは、現実にコミットしない、少し高貴な、悪い意味での自由人の、

本学のリベラルアーツについて

末光 私は常にリベラルアーツに対する尊敬と憧れを持っています。今でも持つています。しかし、今の時代に求められる新しいリベラルアーツが多分、必要なのだと思います。

皆さんも既にご存じかと思いますが、リベラルアーツというのは知識の集積ではなくて、学び方の集積です。知識ではなくて知恵です。私は、臨床性という文脈の中でリベラルアーツを考えたときに、やはり答えは現場に落ちていると思うのです。そのことが一番大事です。決して教科書に書いてあるとか、まして、インターネットにあるからそれをググつてくるということではなくて、あるいは、東京から来た偉い人が言うことではなくて、現場にあるのです。ただ、私たちはその拾い方を知らない。その拾い方を身につけるのがリベラルアーツだと思います。

本場にそういう意味でリベラルアーツというのは非常に



広がりや深み、両方必要です。そして、その深さというのはやっぱり現場と深く関わる中で、しかし、専門分野を越えたいろんな人のまさに相乗りによって、その問題を解いていくことができるというふうに思っています。

そういうことを思うときに、先生が例えば先ほど話が出ました、県立美術館移転反対の問題であるとか、さらに日本学術会議の任命拒否問題とか、そういうことに哲学者の立場から深く関わっておられることに非常に深い感銘を受けておりますが、先生の学問の中でそういった具体的な実践活動というのは多分密接につながっているのだと思います。最後に一言お聞かせいただければ。

宮田 リベラルアーツとは、今、専門性という話もありましたけれども、一般の問題を考える上でも、私たちが生活する上でいろんな問題に直面したときにも、本当に必要なものなのですね。

野家 ありがとうございます。今、末光学長から言われた

宮城県美術館とか学術会議の任命拒否問題に多少なりともこの頃関わってきたというのは、私は大学を二度も定年になりましたので、最後の社会奉仕という意味で(笑)。

それともう一つは、今、末光学長がずっと臨床性とか現場性ということをつまり身近な問題から出発して問題を考えていく。それを、プロブレム・オリエンテッドというふうな言い方を最近では人文系の学問でもしています。現場で起きているいろいろな問題を自分の問題として考えながら、それをさらに自分の学問につなげて考えていくといえますか。

ですから、宮城県美術館も学術会議の問題もこれは、長くなるのでやめますが、そういうプロブレム・オリエンテッドな学問というか、問題を中心にした、現場で起こっている問題を自分の問題として考えていくということ、その一環として私は考えてきたということですね。

最後に一言、全国の大学で教養部が解体してから、なお

かつ教養部を残しているのは東京大学と、それからICU国際基督教大学でしょうか。その二校とも非常にうまくいつていると思いますが、もう一つ、この宮城学院女子大学を付け加えるべきだと思います。

では、教養とは何だということ、僕は先ほど言いましたことの延長性上で言うと、市民的な判断力を醸成するといふか、育成する。それが教養。先ほど加藤周一さんの車の例え話、非常に印象に残ったのですが、以前、一橋大学の学長を務められた阿部謹也先生という歴史家がおられまして、『ハーメルンの笛吹き男』という割とポピュラーな著作も書いておられますが、その阿部先生が一橋の学長の時に、教養ということとを「自分の現在位置を知ること」と述べておられました。

これは僕も大変印象に残っている言葉なのですが、それを僕なりに少し敷衍しますと、山登りの話ですが僕は実は学生時代、ワンダーフォーゲル部において、授業を

サボって山にばかり行っていたのです。山で道に迷ったリ、霧に巻かれたりしたときに一番大事なのは、現在位置、自分が今どこにいるか、ということを確認することです。そうすると、おのずから進むべき方向が見えてきます。

それでは、現在位置を確認するのに何が必要かといえば、山登りの場合には地図とコンパスです。コンパスというのは磁石ですね。地図によつてわれば周りの地形とかを見て、自分が今どこに位置しているのかということを知ります。これは現在で言えば、ニュースを見たりしているいろいろな国際情勢とか、あるいは日本の中の出来事とかを知つて、自分が今どういう状況の中に置かれているか。コロナでヨーロッパ、アメリカ、南米、いろいろそれぞれ違いがありますけど、その中で日本はどうなつて、さらに仙台市はどうかと。そういう現在位置を知るための地図を開く。これはニュースを見ることでもいいし、あるいは本を読むことでも構いません。これは空間的

な現在位置の確認です。

それからもう一つは、コンパス、磁石というのは方向を示してくれることですね。ですから、これは時間的な現在位置の確認。これには歴史というものを知ることが極めて重要になる。自分が歴史の流れの中でどういう位置にいるのか。これは時間的な自己確認。そして、先ほどの地図によつて空間的な自己確認をして、磁石、コンパスによつて時間的な自己確認をする。そのことによつて、おのずから進むべき方向というものが見えてくる、と僕自身は考えています。

ですから教養というのは、時間・空間的な現在位置の確認。そしてこれは、一種の平衡感覚というふうに言うことができます。それから、これから進むべき道。先ほどの加藤周一さんの話にも出てまいりましたが、進むべき方向を見定める方向感覚ですね。この二つを、平衡感覚と方向感覚、これを身につけることが、市民的な判断力の形成につながる、いわば教養であろう

と私は考えております。これからの皆さんのご健闘をお祈りしたいと思います。

宮田 ありがとうございます。大学で身につけたことが、その後のいろいろなものを考える「縁(よすが)」になつてくだされば。本当に今のお話を聞いていると、もちろん大学で学んだそのリベラルアーツというものは今も残っていて、そして、その後の新たな道を進んでいくときに、その学び方が改めて生きていくときがたくさんある。

ぜひ皆さんも、周りで、自分のものとして考えなくてはならない問題、問いというものにはたくさんあると思います。ぜひ、そういったものに目を向けて、それを考える際に、今日のお二方のお話をたくさん思い出しただけだと思います。お二方、今日は本当にありがとうございます。

質疑応答

学生 今日は大変貴重なお話をたくさん聞かせていただいて、誠にありがとうございます。



先生方のお話を聞いていて考えたのが、例えば正しい地図やコンパスがあつたとしても、間違つて、全然正しくない地図やコンパスの方がいいのだと思い、選び取ることもよくあると思うのですが、どうしたら正しい方の地図を見つめることができるのでしょうか。

野家 これは大変難しい問題ですね。正しい地図をどう見つけるか、ということですが、けれども、最初是不完全な地図でも構わないと思いますし、少し道を間違つても構わ

ないと思います。僕は山などで迷つたときは、まず焦らないことです。それで、できるだけ高い木に登つたり、少し高い所に出て周りを見回す、俯瞰するということですね。それで、もし間違つたと気付いたら、直ちに引き返すことです。

だから、最初からベストの地図を選ぶうと思わないで、トライアル&エラーで、幾つかの地図を使つてみる。そして使つた上で、これは使い勝手がいいとか、これは正しいのだという勘が養われてきます。そうしたら、それを重宝すればいいのです。間違つたと思つても、別に後悔する必要はありません。先ほどのとおり、現在位置さえ分かっているら、すぐに引き返すことができます。だから、間違いを恐れないで、あるいは、間違つた地図をつかむ、あるいはつかまされることを恐れないでください。トライアル&エラーです。

私の尊敬している科学哲学者にカール・ポパーという哲学者がいるのですが、その

ポパーに、トライアル&エラーⅡエリミネーションという、単なるトライアル&エラーではなくて、エラーをしたと思つたらそれをエリミネーション、排除する、除外する。失敗したらそれを後の肥やしにするという意味です。

だから当然、初めから正しい道に行くということは難しいし、初めから正しい道を行つてしまつたら、むしろ山登りも旅行も面白くないですよ。たまには変な道に迷い込むことも楽しみだと思つて、トライアル&エラーⅡエリミネーションの精神で進んでいつていただければと思います。

学生 ありがとうございます。

末光 私からのサジェスションは、良い友達を持つことです。自分が間違つたときに正してくれれます。私はうつかり屋なので、よくスケジュールを間違えたりするわけです。例えば今日のこと例えば、仮に「今週の金曜日の野家先生の対談のことだけどき」と担当者に言つたら、「いや、先

生、金曜日じゃありません、水曜日です」と言つて、直してくれますよね。そういうふうな、いろんな人と、とにかく話をすること、自分の思い違いとか、ちよつとしたことでも、それ違うよつて言つてくれる人が何人かいる。それはすごく大事なことです。それは自分の過ちを気付かせてくれる大切な存在です。大切にしたい方が良いと思います。

それからあと、同じことですが、私は何か決めるときに、自分一人で完璧なものをつくつてから、みんなに相談しようとは思いません。すごく大ざっぱなアイデア段階で、こんなことを考えているのだけれど、どうかな、と相談します。そうすると、小羽田先生が、「いや、先生、それはちよつと違います」とか言つてくれて、ああそうかと。じゃあ、こつちの方向かなとか言いながら、だんだん細かいところを詰めていきます。そうしたほうが良いと思います。

初めから山登りで、こつちが下山道に違いないと思つて

決めて行くと、間違つたりすることもあるかもしれない。そういうところは少し、最初はゆつくり大ざっぱに、それで、だんだん間違いないところで詰めていくつてというのがいいように思います。

宮田 ありがとうございます。

す。この後のワークショップでも先生方がいらつしやるということですので、ぜひその時にもいろいろお話を聞いていただければと思います。

対談は以上になります。先生方、ありがとうございます。

